

## 「日本文化の一特質―『道』」

社会科学 四年 百 木 英 明

大河的世界歴史の特殊な一部を構成する支流的我國の歴史・文化に対する数々の考察が今まで多くなされてきている。その一例として、ルース・ベネディクト女史にあっては、「菊と刀」により象徴された矛盾する二重人格の性格による日本人の特徴づけにより、日本文化は「恥の文化」として論じられてきている。更に又最近の日本文化に対する新たな問題意識の高まりつつある状況において、歴史的發展の中で形成されてきた我国文化に独自の特質が数々見いだされている。

ここでは、紙数の関係から階級面には触れず、それら特質のうちの一つである「道」について考えてみる。抑々「文化とは何か？」

この問に対して数々の見解が明らかにされているが、概括的には次の二つに大別されるのである。

その一つは、ローウィーの「文化は、形式的・非形式的な教育によって伝えられる過去からの遺産」とする説に代表される。

これは文化を伝承的な社会共同生活の仕方として、社会的行動という客観的事実の立場から取扱う英米における考え方であり、他のものは「文化とは価値ありと認めた目的に従って行動する人間により直接生産されたもの、若しくはそれが既存のものであっても、少くともそれに附着している価値について有意的に育成したもの」であるとリッケルトがみるように主観的価値創造的な方面を高調する立場である。つまり、文化には、価値創造の主

体的な面と、価値が人々により承認され、伝達され、社会的生活の行動様式として機能する形相的な面と、価値の具体化としての文化財との三つの面が考えられるのである。

文化には本来、ラテン語の *cultura* が示すように、自然を対象にする中で、土地を耕すの意のような物質的側面のみではなく、世話をする、心を癒えずくばるといふ精神的側面での意味が、つまり、物と心の世話ということが含まれているのである。銅直勇先生は、『社会学』の中で「文化を『人間生活に大切な物心両面の対象に対して、注意を深く心を配り、手入れをし、世話をし、本来有するものを立派に育てあげること』と意味しておられるのである。人間は生を受けたその時に、母や周囲の人々の愛情と加護を受け、人間の精神的内面の耕作、手入れが始まり、成長する過程の中で周囲の社会的環境との連関から行為の仕方等の規定を受けながら、個人の自主的な人間性を形成し、他方、自然に対するそれとの調和を目指す働きかけによって価値ある文化を生み、これを社会共同体にその財として戻し、こうして人間は文化・社会・更に歴史においてその主体的役割を演ずるものとして位置づけられるのである。

このような手入れとしての文化の考え方の特質は、我国の文化にも見い出され、その一例として盆栽が考えられる。それは、雄大で、荒々しい自然を人間がある枠の中で、自分自身の内なる発想を基に、しかも、その自然の本質を損わないように自己のものとして育ててゆくことを本質としているが、その際何よりも肝要なのは手入れであり、それを怠ったならば、その自然は死滅する。更に、手入れを受けたその自然も、それを死滅させぬ様に、手入れをする人の親から子に継がれてゆくことにより、その自然としての姿を維持することが可能となる。要は手入れ、心の不断の注意である。ここに我国の文化の特質として「道」が考えられる所以がある。

古来より我国文化の多くに「道」という語が用いられている、剣道・茶道・華道・武士道というようにである。例えば、剣道とはそもそも殺人のための武器である剣を、その使用の点において一モラルにまで高める事を本質とし、単に、小手先の技のみではなく、絶えず自らの敵に対する心の備えを、その持続と技の練達過程を通

して一つの「術」の次元から「道」というモラルの次元にまで高めてゆくのである。

道とは元々人間自身が絶えずそれに依拠し、それを経ねば、自己の最終目的に到達しえないものとして、自らが絶えず切り開き築き設けたものであり、一旦切り開かれたその後も目的に達するために絶えず依拠され、たどり歩まれるものである。道は、目的に達するための進行、前進を絶えず可能ならしめるべく連続的であらねばならず、それに切れ目、断絶があつてはならない。このことは日本文化における「道」においても同様である。更にこの切り開かれた道は、人間が長い間歩み固めて来た経路の結実したもの、すなわち切れ目のない「道」として生まれ、この結果文化の進行過程の中で前代のものが必然的に伝承され、あるいは変形され、更にはまたその時点の新しい文化的創造や外来文化の流入により「重層性」が惹起されるのである。併しこの「道」は到達すべき目的に到る「道」として尙も断ち切れることなく在り続けるのである。とするならばこの「道」の到りつく先は一体何であるのか。又この目的に到る手段としては「道」は如何なるものであるのか。

我国文化の「道」には、禅の影響が考えられる。鈴木大拙氏によれば「禅には、哲学を体験するための一種特別の方法がある。それは、我々自身の存在、すなわち實在そのものの秘密を直接に洞察することであり、……より高い存在を信じたり、戒律的な鍛練を実践したりすることなどによらないで、ある内的体験を無媒介的にうることである。これは直接的な理解の方法に訴えるものであり、「悟り」という体験がそこから起る。悟りがなければ禅はない。禅と悟りは同意語である」この「悟り」が、我国文化の一特質といえる「道」そのものではないだろうか。死を眼前にして生の覚悟をもった鎌倉武士に代表されるような文化の荷担者が禅宗と結びつき、更にそれが庶民の生活文化として発展した時に、人々の意識は「無」を体得しようと我を忘れて自らの道を歩む時の一徹な求道の意識にまで高め、構成されたといえるのであり、以来禅に見る「悟り」への道が過去何年間となく日本人が求める道としてあり、又、この「道」によって、我国文化を特徴づける要因としての「道」が形成されてきたのである。

しかし、この「道」が日本文化における「道」としてその独自性を示す所以の一つは、それが明白に概念化されていないことである。

「道」は悟りに到る一つの方法としてあるとも言いうる。しかし、その方法は、師がその内なる精神的側面を教えることによって知られるものでも、ましてや文章化されたものではなく、自らの求める姿勢の中で、自らが学び、感じ取り、体得することであり、そのためには、自らが自己を「無我」の中において、究極の一つの芸技に到る道を歩むことを終生の覚悟、生の術として、その道を歩み、更に、この究極において、芸技と禅との一致を見る以外に道はないのである。それ故この究極を目指して歩むことはこの「道」を歩むという発心によって既に決まっている。このことは世阿弥の「花伝書」に見る「初心不レ可レ忘」の言葉にも現われている。「道」とは「悟り」を求め、それに到る「道」である。が、その「道」に入ること自体既に発心として「悟り」の域にあるものである。「道」とはそれ自体が目的でありそれへの道をなすものである。それは、西洋的な目的と手段の合理的範疇に属するものではない。この出发点から生じる一つ一つの動きが細やかで自在であり、又、単なる方法手段そのものではない点とにおいて、「道」が欧米人にとり理解し難いものとなっているのではないだろうか。

鎌倉以前の貴族的な歌を出发点とし、鎌倉に入って庶民の中で生活に即したものと形成された我国の文化において、本来的には単なる道具にすぎないものをも、美術的な、芸術的なものとして表わす文化的表現には精神的な面との必然的關係が現われているといえる。

自然と人間との和を求め、更に、茶道における「衆合和人」に見る如き人間と人間との和を目指して、自らの歩む道が技ではない芸を、又、一つのモラルを目指すことにより、我国の「道」として形成されてきたといえるのであり、それは最早表層的一方法のみではなく、深く内なる精神との融合をはかる「道」そのものなのであるといえるのである。